

屈曲多き匹見川
の水を活かす

匹見発電所本館

島根県
益田市



明治中期から始まる中国山地の水力発電所のなかで、島根県の第一号は大正初期に旧出雲電気が建設した佐田町（現・松江市）の窪田発電所です。一方、人口規模が小さく、工業化率も低い石見地区では発電所の設置は遅れましたが、西中国山地に源を発し、いくつかの支流を集めて益田市に流れる高津川は、本川よりも支川の広大な流域、水量の多さ、急流などで立地条件の良さで注目されていました。

こうして日本最西端の豪雪地帯で豊富な水量と高低差を備えた匹見川は、発電所建設の適地として選択され、昭和3年に匹見川水力工業が匹見発電所を最上流に、旧出雲電気が豊川発電所を設置しています。その後18年に両発電所間に澄川発電所が設置され、現在3カ所共現役で稼働しています。

匹見川発電所は本館西側の大部分を発電機室に、残る東部分に制御室が配置され、小屋組はトラス構造の鉄骨で屋根は金属板葺の切妻屋根です。外壁面は妻側に4本、平側に6本の柱型で分割され、妻側中央2本は頂端部を鋭角に張り出した造作がなされ、ゴシック建築のバットレス（控壁）に通じる意匠となっています。また、四隅の柱型は妻側、平側ともに大きく、妻面を強調するつくりです。柱型間の意匠は共通しており、2段の開口部の上に楕円型アーチ状のニッチが据えられており、軒下にはコーニス（軒蛇腹）が付される意匠となっています。なお、外壁はRCではなくコンクリートブロックを積み上げており、内部は鉄骨梁が屋根の野地板を支えています。

同年に建設された豊川発電所完成時の出力3,720キロワットは、当時の島根県で最大でした。屋根の形は異なりますが、側面4列、正面2列の付柱や側面上部に並ぶ5つの欠円アーチなど共通点が見られます。

匹見発電所本館、豊川発電所本館そろってわが国の水力発電の歴史を知る上で貴重な建造物であり、国土の歴史的景観に寄与しているとして、平成27（2015）年3月、国の登録有形文化財に登録されました。



登録有形文化財「匹見発電所本館」
外観はゴシック建築のバットレスやアーチ状のニッチェなど、小規模な教会堂を思わせる洋風の建築意匠でまとめられている

■位置図



道川取水堰堤
取水量は2.087m³/s、左岸側に発電用の取水口ゲートが、右岸側に魚道が設置され、水量の多さを物語っている



登録有形文化財「豊川発電所本館」
側面4列、正面2列の付柱や側面上部に並ぶ5つの欠円アーチなど匹見発電所との共通点が見られる



匹見発電所本館の天窓跡
三角形の屋根の下に丸い窓の跡が残る



匹見発電所本館のニッチェ
厚みのある壁をえぐって作ったくぼみのこと